

イルカ島 メロンとブドウ

クジラは陸に棲んでいた哺乳類が海に戻ったものである、と聞くだけで謎と疑問がいっぱい湧く。我々に馴染みの深いハンドウイルカはその優雅な体型に加えて、人間を恐れず一緒に泳いだり、イルカショーでは多彩な芸もできる。写真で見るシロイルカの特に盛り上がった額とその下にある小さな目は豊かな知性と温和な性格をも思わせる。実際クジラのなかでもイルカの知性はかなり高いといわれている。といってもボクは本物に触れたことがあるわけではない。専門書をひもといたこともない。

ただ、その根拠はテレビなどからの受け売りだから、単なる思い込みや勘違いかもしれない。

ところがである。やはり長生きはしてみるものである。

今年の九月に鳥羽へ行つたとき、イルカのトレーナーをしている人との出会いがあった。

「今朝、飼育して十五年になるハンドウイルカが急死していました。午後から解剖します。よろしかったら見学にいかがですか」と誘われた。

「えっえ！ 行く、行きます。どこで？何時から？」

午後三時ころから、といわれたのを待ちきれず、昼食もそこそこにイルカ島への観光船に乗り込んだ。

事務所に案内されて、時間待ちのあいだ書棚にあったクジラ・イルカに関する本を数冊手にとって、予習をはじめた。

ボクの大きな関心

〈疑問一〉 頭のてっぺんにある鼻腔は脳みそを貫通しているのだろうか？

この疑問はただちに氷解した。なんとイルカの頭部の解剖図は子供向けの図鑑にも記載されている。

〈解答〉

知的中枢とボクが勝手に思い込んでいたあのオデコは「メロン」といわれる脂肪組織の塊で、超音波発信機能を備えている。イルカの視力は弱く、実験的に目隠しをしても餌をとったり、輪くくりもスイスイできるのはコウモリと同じ理屈、超音波を利用しているのだ。

そのメロンの後方に鼻腔があり（そこは頭頂部ではない）、気道を経て肺に通じている。イルカの脳はさらにその後方にある。

ナールホド。 ヒトに例えれば、鼻の下が異様に伸びて、つまり異様に前へ伸びた上唇の下に大きな脂肪の塊・メロンがあつて、その後ろに鼻腔があつて、脳につづくわけだ。

これで脊椎動物・哺乳類に共通な基本形は保たれている。

〈疑問二〉 陸にいた哺乳類が海の中で、真水を飲まず生きられるのはなぜか？

海水の塩分濃度は3.5%とヒトが飲めるものではない。ヒトの体液の浸透圧に等しい生理的食塩水は0.9%である。不思議といえば魚をはじめ他の魚介類の身を食べても塩辛いとは感じない。

それは生まれながらにして浸透圧調整能力を備えているからだろつ。

しかし、イルカ・クジラの先祖は陸棲の偶蹄類だった、というではないか。ラクダ・カバに近いらしい。

〈解答〉 少々専門的になるが、東京大学出版の本に記載があった。その鍵はやはり血液をろ過して尿をつくる腎臓にある。イルカの腎臓には高濃度の尿素が蓄積されていて、血液中の水分の排泄を極力おさえている、らしい。

その外形もヒトの腎臓に比べて大きく、表面はブドウの房の様な顆粒状になっている。それは一つの腎臓が無数の小腎に分かれているから、だそつだ。

頭部の盛り上がりをも「メロン」というなら、ボクはイルカの腎臓を「ブドウ」といいたい。

イルカ島 イレウス

今年の日差しは九月の午後四時を過ぎてもまだ夏の熱気が衰えていない。観光客を乗せた最終便が島を離れると、イルカ島の騒音は急に消えて、岸辺に寄せる波の音だけが残っている。

イルカシヨアのプールの裏手の方角、表通りからは死角になった岸辺では二人の若者がスコップで大人三人が埋まるほどの穴を掘っていた。そのそばには一頭のハンドウイルカが頭部を海に向けて横たわっている。体長三メートル・体重三百五十キロ、間近にみるイルカの体型は神々しいまでの美しい流線型である。

仰臥した白っぽい腹部の皮膚を獣医師はY字型に切り裂いていった。厚さ三センチほどの皮下組織はコラーゲンに富み、その弾力性と保温性は理想的なウエットスーツだ。皮下脂肪はない。

ナイフが腹壁を切り裂いたとき、どっと大量の血性腹水が溢れ出てきた、と同時にガス膨満したピンク色の腸管も飛び出した。風船のように膨らんだ腸管をかき分けると深部には壊死に陥ったどす黒い色をした腸管があった。「イレウスですね」。それは昨日まで元気であったイルカの死因を説明するのに十分である。ハンドウイルカの腸管は長い。二〇、三〇メートルもある。イレウスで死亡することは珍しくない、とのことだった。

二〇一一年の三月、いつものように夜更かしをしたボクは午前一時ころ床についた。

一眠りして、何か腹の具合が悪くて目が覚めた。しばらく様子をみていたが、胃薬でも飲もうと思つて階下の台所へいった。そのころにはミゾオチ辺りの違和感は鈍い痛みになってきた。胃薬（愛用のメサフィリン）では治まりそうにはない。

「この痛みは胃の痛みではなさそうだ」。・・・心臓？ 肺？ それとも胆石・腎結石？ どれも違うナ・・・痛みはますます強くなってきた。かつて経験したことのない激痛だ。「ひよっとして腸間膜動脈でも詰まったのかな？ それならただではすまんぞ」

気がついたとき、家内が頭をかかえるようにして支えてくれた。なんでも台所で物音がしたのでおきだすとボクが気を失って倒れていたとのこと。「救急車を呼びましょうか？」といったのみ「そんな必要はない」と答えたそうだ。ボクにそんな覚えはない。

午前六時ころ、病院の救急室に運ばれた。すぐさま、若い当直医がときばきと対応してくれた。その間も激痛は漸増してくる。「痛いので唸りますが、気にせんでください」とそばにいる病院のスタッフに言った。意識レベルはむしろ高まってくるようだが、激痛はもはや臨界に近い。CT検査を終えてレントゲン室から戻ってきた医師がいった。「イレウスですね」

緊急手術の準備もされたが、イレウス管と点滴によって五時間後には痛みが消失した。ボクが生還できたのは救急隊や病院スタッフの迅速な対応、つまり日本の成熟した社会システムのおかげである。

それに「運」もある。

イレウスという致命的な病気に罹った哺乳類。ヒトに生まれた老人は助かり、壮年期のイルカは独り海底で息を引取った。

〈追記〉「イレウス」・腸閉塞。その原因により腸重積・腸捻転ともいう。要するに何らかの原因で腸管が詰まり、内容物が停滞する。結果的にその部の血流が途絶えて腸管壊死に陥ると細菌増殖や体液のバランスが崩れてショック死する。